

# 藝大通信



10  
MARCH  
2005

TOKYO  
**GEIDAI**  
東京芸大広報誌

## 特集 芸高創立50周年

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校の歩みとこれから  
佐藤眞・粕谷美智子・松原勝也・山本文茂

### 教員は語る

—芸大への期待・抱負・提言—第二回 松下計×藤本隆文

新連載 クラブ・サークル訪問 サンバ・パーティー



「シュブリングン」40×90×20cm  
(丸子成明写真事務所)

宮田亮平 (みやた・りょうへい)

1945年新潟県生まれ。1970年東京芸術大学美術学部工芸科卒業、72年同大学院美術研究科鍛金専攻修了。84年美術学部助手、88年講師、90年助教授、97年から教授。2001年～04年美術学部長。04年から国立大学法人東京芸術大学理事・副学長。

題名は独語で「跳びはねて行く」。イルカの豊かな伸び具合と躍動感。日常では冷たいイメージの金属との融合を表現したという。わが国現代工芸美術の先導的役割を担い、永年の銅を素材とした鍛金技術の研究・人材の指導・育成に尽力したとして平成16年度(第31回)日本銅センター賞を受賞。

## 第10号目次

3....11 特集

### 芸高創立50周年

東京芸術大学音楽学部  
附属音楽高等学校の  
歩みとこれから

[座談会] 芸高の歴史と展望

佐藤眞・粕谷美智子・松原勝也・山本文茂

附属音楽高等学校50年史 海老原直秀

卒業生・在校生インタビュー 藤家渓子／瀧村依里

創立50周年記念事業

12....13 芸大の歩き方

上野の杜のキャンパスガイド

第2回 彫刻 布施英利

16....17 新連載

クラブ・サークル訪問

第1回 サンバ・パーティー 野村真理

14....15 タイムカプセルに乗った芸大

【第10回】最終回 1991～2000年

佐藤道信〈東京芸術大学美術学部1999年〉

瀧井敬子〈東京芸術大学音楽学部1998年〉

18....21 教員は語る

芸大への期待・抱負・提言

松下計×藤本隆文

22....23 NEWS2004.9～2005.2

編集後記

編集発行

東京芸術大学芸大通信編集部

編集委員

船山 隆 (音楽学部楽理科教授・編集長)

長谷部浩 (美術学部先端芸術表現科助教授)

布施英利 (美術学部助教授美術解剖学研究室)

安藤政輝 (音楽学部邦楽科助教授)

アートディレクター

蓮見智幸 (美術学部デザイン科助教授)

制作

株式会社 平凡社

発行日

平成17年3月10日

お問い合わせ先

東京芸術大学総務課

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

電話 03-5685-7509 FAX03-5685-7760

e-mail toiwase@ml.geidai.ac.jp

URL http://www.geidai.ac.jp

特集

# 芸高創立50周年

【座談会】

## 芸高の歴史と展望

佐藤眞

粕谷美智子

松原勝也

山本文茂



東京芸術大学  
音楽学部附属  
音楽高等学校の  
歩みとこれから

二〇〇五年、音楽学部附属音楽高等学校が  
創立五〇周年を迎えた。  
半世紀にわたって、  
優れた音楽家・教育者を輩出してきた  
「芸高」の歴史と  
新しい時代のなかで  
果たすべき役割について特集する。



創設の経緯。さまざま思い出

佐藤 私は、芸高（東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校）の第一期生ということで、創立のいきさつからお話ししたいと思います。そもそも初代の校長を務められました声楽の城多又兵衛先生や作曲の下總院一先生などが、芸大の音楽学部に附属高校の必要性を感じて、創設に踏み切られた。そのお考えのもとにあつたのは、当時のヨーロッパではすぐれた

演奏家や作曲家が、幼少の頃から早期教育を受けている。そして、それを育てる公的な機関がある。にもかかわらず日本にはないということで、その必要性を痛感されておられた各科の先生方と話し合つて、意見を伺いも文部省に提案し、ついに認可がおりた。下總先生から、そのように聞いております。

私自身は、一〇歳のときから下總先生に作曲の指導をいただきまして、高校受験の年になつたとき、ちょうど新聞に芸高ができるという記事が載つたんですね。創立の年は、四月の下旬に入学式があつたんです。私たちの代は、一年生のときは一年生だけ、二年生のときに一年生が入ってきて、三年生で三学年が初めてそろつたわけですから、先輩がいないという変則的な高校生活を送りました。

その当時、場所も上野ではなくて、お茶の水にあつた芸大の分教場を使つたんです。学校設立の認可は下りていたのですが、予算がゼロだった。ですから、改裝工事ができないで、その校舎をそのまま使つた。ピアノなどは古いものがあつたんですけど、教室の窓枠が鏽びて、窓が開かない。そんなところで勉強をしました。

粕谷 私は六期生なんですが、その頃になりますと、先輩がいらっしゃるので、今開校したばかりの学校という感じはもうなかつたです。ただ、運動場といえるほどのものではない小さなスペースしかなくて、体操をするにしても、ほとんど道具はなかつたですね。卓球室だけは、



佐藤真

(さとう・しん)  
教授／作曲科／附属高校校長

一九三八年茨城県生まれ。

一九五七年東京芸術大学音楽学部附属高等学校卒業（第一期生）。

一九六三年東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。

一九六四年東京芸術大学非常勤講師。

助教授を経て一九九一年より教授。

二〇〇〇年より東京藝術大学音楽学部附属高等学校校長。

立派に一部屋あつて、それが唯一芸高生が休憩のときに集まる場所でしたね。

芸高については私はよく知らなかつたんですね。ところが、あるときに、専門的に勉強するならば芸高に入らなければ

だめだよ、と作曲の池内先生にご指示をいただいて、小学校五年生のときに安川先生にレッスンを受けたのが始まりです。

ソルフェージュを芸大の作曲科の学生に交じつて日仏学院での宅先生のクラスレッスンを受けていたくらいで、芸高というところがどれだけすごいところとか、

何も知らないで、ただ楽しくかつ夢中になつて勉強していましたね。

松原 芸高に入るきっかけについてなんですかけれども、私も粕谷先生と少し似た

ようなところがあるかもしれません。芸

高、芸大の存在をほとんど意識したこと

がなく育ちまして、中学三年生になつてから芸高の存在を知り、慌てて先生についてソルフェージュを特訓して、何とかすべり込んだみたいな感じでした。

その頃の芸高は、昔の分教場だった雾囲気がまだ色濃く残っていたのではないで、と思うんです。せいぜいバスケットコ

校が協力関係を保つて、相当高い成果を得ることで最高の環境ができ始めたのですが、戦争のためにそれがなくなつてしまつた。戦後になつて、動きはあつたんですけれども、芸大ができるからもなかなか実現化しなかつた。

そういう状況にあって、戦前から戦後の皆さんに信じていた、音楽の専門家を育てるための原理が三つあるんですね。

第一が、「早期教育」。ヴァイオリンは三歳頃からとか、あるいはピアノは五歳、

六歳頃から始めるとか、音楽の基礎の専門的な教育は早期教育が第一だといふ考え方ですね。声楽家の場合は身体の発達もありますが、高校生くらいから専門家になるための指導を受けて訓練を始めます。

第二が、「連続教育」。声楽家になるための指導を受けて訓練を始めます。

第三が、「個人教育」。早くから音楽の基礎を身につけるべきだといふことです。第二に「連続教育」。早く訓練を始めて、成人に至るまでそれを

貫して、すぐれた同じ先生が同じシステムで長期的に指導していく。あるいは同じ先生でなくとも、同じような方法で、

継続的に続けていく。第三は「個人教育」です。音楽の専門家の教育は、一対一で最高の先生とすぐれた弟子、その個人教育というのがなければならない。集団で、

少人数クラスである程度できる教育もありますけれども、やはり根本は個人教育

である。

早期教育、継続教育、個人教育というものがなければしつかりした専門家の育成はできないということが日本でも認識

山本 芸高の創設に関しまして、佐藤先生がおつしやったように、日本では高等教育において音楽の専門家を育成するための公的機関がなかつたんですね。歴史的には、芸大の前身である東京音楽学校の卒業生たちの「同声会」というのがありますし、その会が発案し、「上野児童学園」という音楽の専門教育を施す機関をつくりました。東京音楽学校の校地、校舎、施設を利用して、東京音楽学校の専門家の先生たちが若い子供たちを教えるという機関だつたんです。昭和一〇年代

くらいの話ですが、同声会と東京音楽学

院が協力関係を保つて、相当高い成果を得ることで最高の環境ができ始めたのですが、戦争のためにそれがなくなつてしまつた。戦後になつて、動きはあつたんですけれども、芸大ができるからもなかなか実現化しなかつた。

そういう状況にあって、戦前から戦後の皆さんに信じていた、音楽の専門家を育てるための原理が三つあるんですね。

第一が、「早期教育」。ヴァイオリンは三歳頃からとか、あるいはピアノは五歳、

六歳頃から始めるとか、音楽の基礎の専門的な教育は早期教育が第一だといふ考え方ですね。声楽家の場合は身体の発

達もありますが、高校生くらいから専門家になるための指導を受けて訓練を始めます。

第二が、「連続教育」。声楽家になるための指導を受けて訓練を始めます。

第三が、「個人教育」。早くから音楽の基礎を身につけるべきだといふことです。第二に「連続教育」。早く訓練を始めて、成人に至るまでそれを

貫して、すぐれた同じ先生が同じシステムで長期的に指導していく。あるいは同じ先生でなくとも、同じような方法で、

継続的に続けていく。第三は「個人教育」です。音楽の専門家の教育は、一対一で最高の先生とすぐれた弟子、その個人教育

というのがなければならない。集団で、

少人数クラスである程度できる教育もありますけれども、やはり根本は個人教育

である。

早期教育、継続教育、個人教育というものがなければしつかりした専門家の育成はできないということが日本でも認識

得ることで最高の環境ができ始めたのですが、戦争のためにそれがなくなつてしまつた。戦後になつて、動きはあつたんですけれども、芸大ができるからもなかなか実現化しなかつた。

そういう状況にあって、戦前から戦後の皆さんに信じていた、音楽の専門家を育てるための原理が三つあるんですね。

第一が、「早期教育」。ヴァイオリンは三歳頃からとか、あるいはピアノは五歳、

六歳頃から始めるとか、音楽の基礎の専門的な教育は早期教育が第一だといふ考え方ですね。声楽家の場合は身体の発

達もありますが、高校生くらいから専門家になるための指導を受けて訓練を始めます。

第二が、「連続教育」。声楽家になるための指導を受けて訓練を始めます。

第三が、「個人教育」。早くから音楽の基礎を身につけるべきだといふことです。第二に「連続教育」。早く訓練を始めて、成人に至るまでそれを

貫して、すぐれた同じ先生が同じシステムで長期的に指導していく。あるいは同じ先生でなくとも、同じような方法で、

継続的に続けていく。第三は「個人教育」です。音楽の専門家の教育は、一対一で最高の先生とすぐれた弟子、その個人教育

というのがなければならない。集団で、

少人数クラスである程度できる教育もありますけれども、やはり根本は個人教育

である。

早期教育、継続教育、個人教育というものがなければしつかりした専門家の育成はできないということが日本でも認識

得ることで最高の環境ができ始めたのですが、戦争のためにそれがなくなつてしまつた。戦後になつて、動きはあつたんですけれども、芸大ができるからもなかなか実現化しなかつた。

されていましたし、これは世界共通の原理でありまして、多くの先生方がそういう主張をなさつてきたことが広く機運となつて、一九五四（昭和二九）年に音楽高校が出発したといふうに理解しておられます。

### 芸高生のプライドと「心構え」

**佐藤** 開校当時の芸高生活は、設備は劣悪でしたけれども、音楽に打ち込めるというので、すごく燃えて、充実した幸せな毎日でした。学科の先生も、上野からお茶の水まで片道三〇分かけて、芸大から高校に教えにきてくれました。PTAの組織である「響和会」から、先生方の交通費ぐらいは出たかもしれないけど、原則としては手弁当で来てくださったんですね。本当にそれはありがたいと思つています。いろいろな情勢は悲惨と言つてもよいくらいだつたですけれども、生徒たちの精神状態は非常によかつたです。

**山本** 私は佐藤先生と同じ、一九五七年に芸大に入学したんです。私は楽理科だったんですが、附属から来た佐藤先生初め仲間の人たちが本当に優秀で、こういふ人々がいるんだと思いましたね。私は地方の高校の出身でしたから、まるで雲の上のようないい人ばかりでした。先輩もまだいない高校で学び始めたという、新進気鋭の進取の精神を持つて、意欲的に勉強をなさつた人たちがもつ存在感をひしひしと感じましたね。



粕谷（多）美智子

（かすや「おおの」・みちこ）  
教授 器楽科（ピアノ）

一九四四年東京都生まれ。  
一九六一年東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校卒業（第八期生）。  
一九六六年東京藝術大学音楽研究科修士課程修了。  
一九六八～七二年ド・エリス女子学院音楽科非常勤講師。  
一九八二～八九年ド・エリス・ショトウットガルト国立芸術大学演奏家コース修了。  
東京藝術大学音楽学部非常勤講師、助教授を経て二〇〇三年より教授。

粕谷 佐藤先生がすごく幸せな高校生活

だつたとおっしゃいましたが、私はまわりを見ると幼い頃から芸高を目指している人ばかりで、たいへん厳しい競争のなかに放り込まれたと感じました。中学のときには、特技としてピアノが弾けると

いうことが自分の存在をアピールできる便利なものでもありました。学校からもある程度は大目に見てもらつてていた部分もありました。芸高に入つて、それこそノックダウンされたという感じで、人前で音を出すことすら怖くなつて、長い間、劣等感に悩みました。

今芸高の人たちはみんなが仲良しで、お互いを認め合える雰囲気になつていますが、その頃は競争心をむき出しにしていたように感じます。というより、私自身がまわりの実力に圧倒されて、そう感じていただけかもしれません。ですから、これから受験する人たちは、芸高といふところは、とにかくまわりの人たちがすごいから、精神的に負けないような強さがないとやつていけないというのです。

**山本** 私は佐藤先生と同じ、一九五七年に芸大に入学したんです。私は楽理科だったんですが、附属から来た佐藤先生初め仲間の人たちが本当に優秀で、こういふ人々がいるんだと思いましたね。私は

れはそれでいいとは思いますが、

松原 芸高には、東京だけではなくて、全国から生徒が来るんですけど、みんな一国一城の主みたいな感じで、そういうプライドのぶつかりがありましたね。私の

場合、芸高の一年のときから室内樂に積極的に取り組むことになつて、アンサンブルのリハーサルに励んだのですが、そのなかで、音楽的な信頼関係をどうやって築いたらいいのかということをお互いに模索したんです。その結果、「アカンサスコンサート」のような舞台で、特別な瞬間を共有した仲間として認め合うことができるようになりました。そこで充実感を味わつて、すばらしい人間関係が築けたことは、私にとってはとても幸運だつたと思います。

**佐藤** 親の反対を押し切つてでも音楽をやるんだというくらいの気持ちで、私たちの時代は芸高に入つたものですから、勉強に対して後には引けないみたいなものがあつたと思います。今の生徒たちに、そういう気持ちはありませんくて、音楽という職業は、むしろ格好いいくらいに思つているところがあるかもしれない。け

れども、私たちの頃は、悲壮感みたいなものがありましたね。

粕谷 今の生徒たちを見ていてすごく幸せそうだし、たしかに悲壮感みたいなものはあまり感じられませんね。小学生、中学生のときに、あなたは楽器が弾けるからほかのことはできなくてもいいわよ、

護な子どもたちが多いですね。小学生、中学生のときに、あなたは楽器が弾けるからほかのことはできなくてもいいわよ、

それと、いちばん気になるのが、過保護な子どもたちが多いですね。小学生、中学生のときに、あなたは楽器が弾けるからほかのことはできなくてもいいわよ、

が芸高では、地方から来る人も多いわけですから、どうしても一人で暮らさなくてはいけない。自分で自分をコントロールしながら学校生活を送るわけで、ずっと親元で何もしないで育つてきた人たちが、急に放り出されてうまくいくはずがないわけです。そういう問題を抱えて、迷つている生徒たちがいないとはいえないません。

例えばヴァイオリンさえ素晴らしく弾ければ世の中に通じるというものではないと、つねづね思うのです。その人から実技を取つたときに、一高校生として、一大学生として、社会に通じるような人間に育つていないと、本当の意味での音樂もやつていけないのでないか、というのが私の持論なんです。

だから、私は芸高の生徒に接するときに、あなたは優秀だからこれはできなくていよいわということは許さんいんです。ドアの出入りから服装のことからビシビシ注意するので、生徒たちから敬遠されているんですけども、だれかが言わなければいけないと思っていています。演奏家

とはいえ社会のなかで生きていかなくてはいけないわけで、ただ自分が上手く弾ければ聴衆がついてくるのではありません。オーケストラの人たちだとしたら、やはり一つの集団のなかで生活していくなくてはいけないので、規律を守れないような人間ではやつていけませんよね。

**山本** 普通科の高校でも、教科の指導と

生活指導をどういうふうに調和をとるかというのは大変な問題なんですが、芸高では専門の教育がありますから、その三つの問題がつねに存在しているんですね。しかも、その三つが相互にかかわり合いを持っているものだから、先生方のご指導も本当に大変なんです。

私が校長の時代には、アベレージとしては一般学科もできるし、専門も優秀で生活態度もよいという生徒のほうが多いです。音楽の専門は優秀だが、生活指導の面ではどうかという生徒もなかなかいました。普通の高校だったらそういう生徒は切り捨てて行くんでしょうが、芸高の先生方は決して直接的な否定をしないで、全体を見て伸ばしてあげるという面がある。ただ、それに生徒のほうが甘えている側面もあるのかとも思います。

**松原** 今の学生を音樂家として見た場合

に、とても能力が高くて、理解力が早くて、吸収力もすごくあるのに、どこかで抜け落ちてしまっている部分があるのではないかという印象を受けます。しかし、挫折とか苦悩した過程を経ないで大学に進み、そのまま世に出た人が、素晴らしい



松原勝也  
(まつばら・かつや)

助教授 室内樂(ヴァイオリン)

一九六三年東京都生まれ。

一九八一年東京芸術大学音楽学部器楽科卒業(第一六期生)。

一九八六年東京芸術大学音楽学部器楽科修了。

一九九〇年東京音楽大学非常勤講師。

一九九八年より東京藝術大学音楽学部器楽科助教授。

い音楽家として聴衆に感動を与えるような演奏ができるかということが疑問で、今の若い演奏家には危惧を覚えています。何不自由なく、音樂的なインフオーメーションや、優秀な先生からのテクニックとメソッドを与えられて、ピアノやヴァイオリンをとても上手に弾くという意味では今の学生たちは高いレベルに達していると思います。けれども、ヴァイオリ

ンを弾く技術にしても、苦労して勝ち得るというか、本当に思い悩み、そして得たものが自分の実になっていくという積み重ねが、人格形成の面においても非常に大切なプロセスになつていくと思うのですけれども。

また以前からの念願なんですが、唯一の国立音樂高校として全国から生徒たちが来ますので、寮の必要性を感じています。音樂の練習施設のしっかりした、そして責任を持ってお預かりできるような全寮制の施設が、五〇周年を迎えて今までできていないというのは最も大きな問題だと思つうんですね。経済的にも、東京で遮音装置のついた部屋を借りるのは大変なことなんです。ですから、練習室を完備して、夜間の練習もできるような全寮制の施設が本当に求められていると思います。

部構成だと、邦楽を目当てに来た人は前半で帰つてしまい、休憩を挟んで洋楽のお客さんに入れ替わるんじやないかと当初は危惧していたんです。それはどんでもない思い違いで、実際にやつてみると、洋楽の演奏会の前に邦楽があるというのはなかなかいいものなんです。旧奏楽堂での五〇周年記念演奏会のときも、最初に邦楽を置いたんですけど、赤い毛氈を敷きますと祝典的な感じが出て本当に素晴らしいと認識を新たにしました。

**山本** 芸高の基本的な使命として、西洋音樂の専門的な演奏家・作曲家を育てることが第一の課題ですが、世の中が大きく変貌しているなかで、音樂をつくる人々を再現して演奏する人のほかに、音楽を世の中と結びつける人、つまり一般の人々と専門的な人々とをつなぎとめています。

それからもう一つ、邦楽科が専門でできましたように、ジャンルを広げていく人々と専門的な人々とをつなぎとめています。それが、特に合唱が素晴らしいんです。オーケストラの合唱をピアノ科の生徒たちが受け持ちまして、声楽の専門家のよう

思つて見ております。

**佐藤** 寄宿舎のことは、私も最大の問題だと思つています。二年前に平山学長の

指示で、「芸高のあり方検討委員会」がで

きまして、各科の主任の先生が集まって、

一年間いろいろな見地から芸高の現状と

よりよい未来について検討をしたんです。

そのときにも、寄宿舎の問題は非常に重

要であるとの認識で、私立の音樂大学の寄宿舎をいくつか見学に行きました。解

決しなければならない大きな問題なんですが、すけども、まだ手つかずにいるんですけど、

なんとか実現に近づけたいと思います。

それから邦楽専攻についてなんですか

れども、毎年一回、芸高の定期演奏会を

やつているんですが、邦楽を前半に置い

て、後半にオーケストラや合唱という二

部構成だと、邦楽を目当てに来た人は前

半で帰つてしまい、休憩を挟んで洋楽の

お客様と入れ替わるんじやないかと当

初は危惧していました。それはどん

もない思い違いで、実際にやつてみると、

洋楽の演奏会の前に邦楽があるというの

はなかなかいいものなんです。旧奏楽堂

での五〇周年記念演奏会のときも、最初

に邦楽を置いたんですけど、赤い毛氈を

敷きますと祝典的な感じが出て本当に素

晴らしいと認識を新たにしました。

**山本** 芸高の伝統のなかで、この定期演

奏会のレベルの高さは誇れると思うので

すが、特に合唱が素晴らしいんです。オ

ーケストラの合唱をピアノ科の生徒たち

が受け持ちまして、声楽の専門家のよう

な声の大きさといった面では及ばないで

ですが、意欲が本当に伝わってきて感動的ですね。この伝統はぜひ続けていくほしいと思います。

**粕谷** 寄宿舎については、ぜひ実現にむけ足を踏み出していくべきだと思います。ときどき地方に行きますと、お母様方が、芸高を目指させたいけれども、東京で一人で生活させるのが不安だとおっしゃる。だから、高校の間は手元に置いて、大学からにしますというようなことを耳にすることが多いんですね。ですから、実力があつても、二の足を踏まれる父兄は多いと思います。

特にピアノですと、楽器が大きいですから、どうしてもスペースが必要になつてくる。安心して勉強もさせられて、生活もコントロールをしてくれる人たちがそばにいる環境があれば、もつと優秀な生徒さんたちが地方から集まると思うんですね。どちらかといえば、人間的に地方の人たちは、都会つ子よりも強いですね。小さい頃から、レッスンのために北海道とか遠方から飛行機に乗つて来たりするわけです。そういうことを自分でコメントホールしながら取り組めるというのは、心構えが違つてくるんでしょうね。

**佐藤** 芸高の問題ではなくて、芸大の問題かもしれませんけど、高大一貫教育といいますか、私の専門の作曲では芸大に推薦入学の制度があるとともにいいと思うんです。二年生の頃になるともう新しい音の世界に興味をもち自由に作曲しはじめ、三年生ではすでに相当高いレベルのところまで行つている優秀な生徒もい



山本文茂

(やまと・ふみしげ)  
教授 音楽教育

一九三八年愛知県生まれ。  
一九六一年東京芸術大学音楽学部講師・卒業。  
一九六一・七六年福島大音楽部助教授(講師)。  
一九七八・七八年福島大音楽部助教授(講師)。  
東京芸術大学音楽学部助教授を経て一九八八年より教授。  
一九九七年より二〇〇〇年まで東京藝術大学音楽学部附属音楽高校校長(併任)。

る。ところが、入試というものがある以上、どうしても三年になると受験のための勉強をしなければならず、それに時間とエネルギーを大きくとられてしまうんですよ。そういうことがなければ、どんどん新しい作曲の道を進んでいくことができるのに、入試のためにそこで足踏みしてしまうということがあるんですね。

優秀な生徒は推薦入学で芸大に進めれば、どんどん効率よく才能を伸ばしていくけるのではないか、せっかくの附属高校でありながらと残念に思つているんですけどのではありませんか。

やはり、感覚的には、一般の人とわれわれはかなり乖離があると思うんですね。自分は孤高の道を行くんだというだけでなく、世の中に媚びるとかいうことはなくて、自分がどうやつたらたくさん的人に対して理解してもらえるのかという努力をする芽を、高校生のうちから少し育んでいくというのもいいんじゃないかなという感じがしますね。

**松原** 音楽家の社会における位置、自発的に社会とどうやってかかわりを持つかという点から言いますと、実現可能かどうかは別にしまして、高校のうちから施設や学校のようなところで演奏をする、今はやりの言葉で言うと「アウトリーチ」ということでしようか、そういうことは、決して悪くはないと思うんです。

学校のなかだけで行われる発表会はとてもレベルが高くて素晴らしい。だけど、

芸大が夏休みに入つてもまだ芸校生のレッスンだけはしなければならない、とい

うようなことがおこる。レッスン時間の設定にも当然高校生としての制約が伴う。芸高とかかわることは、単にレッスンだけでなく、数々の業務を引き受けていることでもある。科によつて事情は異なるでしょうが、先生方のなかには、芸高とのかかわりが少し荷が重いと感じている向きがあるのも事実です。

このようなことについて、何かよい方策を講じることはできないものでしょうか。

**粕谷** 芸高のなかでは、大学の先生方がいらして、専門はもちろんですが、教科に関しても素晴らしい授業をしてください。

これまでそのことを認識して授業を受けているかと、首を傾げたくなるようなこと生徒たちはたくさん志願者のなかから選ばれ、こういう恵まれた環境を与えた人間であるという認識をもう少し持つてほしいなと思うのです。

芸高へ入りたくても入れず、場合によつては音楽の道もあきらめなくてはならない人たちもいるわけですよね。そんな中で、自分たちはこの環境を与えられた数少ない人間なのだから、いろいろなものを吸収しようとする気持ちを強く持つてほしい。もつともつと貪欲に勉強してほしいという気がします。高校時代はいちばん大事な時期なのですから。

二〇〇四年十一月三〇日附属音楽高等学  
校会議室にて)

# 附属音楽高等学校

海老原 直秀

## 一 創設期

### (一) 設置の構想と設置申請

学校教育法の施行に伴い、東京音楽学校においては一九四六（昭和二十一）年から大学昇格を念頭に置いた新制度案についての審議が行われ、そのなかで早期教育の施設についても検討された。翌四七年一月の教授会では大学のカリキュラム案と高等学校の新設について審議され、同年五月には改めて音楽高等学校の併設について審議され、さらに「東京音楽大学」に附属高等学校を併設するという新たな案について教科科目や単位数等についての詳細な検討が行われた。その結果は同月中に「学校改革案」としてまとめられた。この構想は高校のほかに中学校、小学校をも含むものであり、附属高校の教科科目については作曲・声楽、ピアノ、弦、管打楽器の専攻科目のほかにソルフェージュ、合唱、合奏、音楽概論等が週一五時間となっていた。なお、邦楽専攻については審議未了につき保留となっているのは需要である。一九四九年（昭和二十四）年五月に附属施設として附属音楽高等学校を含む「東京芸術大学設置申請書」が文部省に提出されるが、附属高校については認可されなかつた。この中で現在異なるのは普通科目のなかに「図画」という美術科目の選択が可能となつている点である。なお、音楽大学以外の進学希望者に対して、第一学年から普通科目重視の別のカリキュラムが設けられているといつめで現実的な教育的配慮が見られる。また、生徒の約半数を収容できる寄宿舎を持つ予定と明記されているのは将来を創設準備の当時からすでに見通す卓見である。五年八月の教授会で「専攻科、附属高校設置案」が審議され、山田、長谷川、田尾、矢田部、福井、下総の六教官が委

員に選出され、その後、附属高校設置の努力が続けられるが、文部省の不認可がネックとなつていた。ところが、五年後に突然、転機が到来する。

一九五四（昭和二十九）年三月三十日に「国立学校設置法」の一部が改正され、「国立学校設置法施行令」が公布される。すなわち、国立学校の附属施設の新設、廃止が、以後、この政令だけでは可能となつた。こうして、国会審議なしで東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校の設置が認可されたのである。しかも、緊縮財政下、予算〇での新設であつた。カリキュラムは「学校改革案」から声楽専攻が削除され、邦楽専攻は設置されなかつた。初代校長に城多又兵衛教官が就任し、北海道芸大から新野仁助氏が音楽学部講師に着任し、附属高校勤務となる。また、伊藤良平事務官が事務主任となり、ほかは全て芸大教官が併任して、附属高校の専任教員は〇であった。附属音楽

高校の設置以前から約五年間にわたり、文部省と折衝にあたつた城多又兵衛氏の存在は附属音楽高教へのかかわった彼は東京音楽学校教官として大学への昇格の審議の時から附属高校の併置を熱心に主張した。

## 二 お茶の水期

### (一) 創生期（一九五四年～一九六七年）

新野氏は着任後、教育と連絡にあたるが、国立

学校設置法施行規則の改正に伴い、一九五八（昭

三）年に教頭となる。開学以来、創成期の

三年間、彼は附属音楽高校運営の中心人物であ

り、音楽高校としての基礎づくりに励んだ。五五

六年六月には教官定員が三名増員され、専任教諭三名となつた。五七には附属音楽高校の運営に関する「附属音楽高校運営規則」が制定され正式機関となる。六一年六月には教官定員が三名増員され、専任教諭六名体制となる。六三年には外山浩爾（音楽）が専任教諭となり、六五年に教頭新野仁助教官が附属高校専任、石塚信男事務官が事務主任となる。同年十月に梅谷進教諭（音楽）が着任し音楽担当教諭一名となる。ところで、開学当時から入試科目には一般学科なく、専門実技科目と聴音のみであったが、一九六四（昭和三十九）年に、国語と外国語が入つた。開学当時から、カリキュラムには選択科目に美術があり、外国語については「三年次から独語、仏語も選択できるようになつていて。これは七三年に新カリキュラムに改訂されるまで続く。当初の四七年「学校改革案」に見られた声楽専攻はなくなつていて、五六年七月に仙台、盛岡、釜石、宮古の東北各都市に第一回校外演奏旅行を行い、好評を博している。

### (二) お茶の水から上野移転期（一九八五年～一九九四年）

一九八五（昭和六十）年からの十年間は「清野イズム」の継承期であった。一九八九（平成元年十一月に第一回定期演奏会（響和会主催）が旧演奏室で開催された。なお、九〇年十月山梨県都留における校外演奏会を最後として校外演奏会は行われなくなつた。九一年十一月には全国音楽高校協議会全国大会が附属音楽高校を会場として開催された。

一九八八（昭和四十三）年に都立高校に勤務の清野澄夫氏が教頭に着任し、六九年には教官定員一名増で本多英男教諭（体育）が着任する。同年七月には第一学年を対象に千葉県石井海岸で初めての臨海学校が開かれ、翌七〇年一二月には長野県富士河口湖で初めてのスキー教室が開かれる。六〇年以後、中断していた校外演奏旅行は七一年に再開され、土浦市で開催された。七二年から入試科目に樂興と社会が加わる。七三年からの新カリキュラムでは美術がなくなり、外国语も英語のみとなる。七四年五月長野県芦川で初めての春季校外合宿が行われ、以後、全学年必修の行事となる。七八年から入試科目に数学が加わり、以後三年間は国語、英語、社会、数学の四科目であったが、八年一度入試からは社会がなくなり、以後、国語、

数字、英語の三科目となる。八〇年によつやく教諭が定員化され、高松保子養護教諭が着任する。七六年には糸川英夫氏を招いて講演会を開くなど音楽実技のみならず、当時はスポーツや教養を重視した教育が行われ、遅刻、欠席を厳しく戒め、基本的生活習慣を身につけさせ、授業態度、学校生活全般における規律を徹底し、校外合宿訓練による心身の鍛錬と普通科目の重視、実力試験の実施、講演会の開催などによって、「音楽家養成のための全人教育」を目指した「清野イズム」は創生期後の附属音楽高校を十七年間にわたり、リードとして形成したのであった。

### (三) お茶の水から上野移転期（一九八五年～一九九四年）

一九八五（昭和六十）年からの十年間は「清野イズム」の継承期であった。一九八九（平成元年十一月に第一回定期演奏会（響和会主催）が旧演奏室で開催された。なお、九〇年十月山梨県都留における校外演奏会を最後として校外演奏会は行われなくなつた。九一年十一月には全国音楽高校協議会全国大会が附属音楽高校を会場として開催された。

一九八八（昭和四十三）年に都立高校に勤務の清野澄夫氏が教頭に着任し、六九年には教官定員

一名増で本多英男教諭（体育）が着任する。同年

七月には第一学年を対象に千葉県石井海岸で初めての臨海学校が開かれ、翌七〇年一二月には長野

県富士河口湖で初めてのスキー教室が開かれる。六〇年

以後、中断していた校外演奏旅行は七一年に再開

され、土浦市で開催された。七二年から入試科目

に樂興と社会が加わる。七三年からの新カリキュラムでは美術がなくなり、外国语も英語のみとなる。七四年五月長野県芦川で初めての春季校外合宿が行われ、以後、全学年必修の行事となる。七八年から入試科目に数学が加わり、以後三年間は

国語、英語、社会、数学の四科目であったが、八

年に事務官からの配置転換で和久和一氏が国語の

専任教諭となつたが、専任教諭はこの一名のみでほかは全て大学教官が併任で勤務した。初年度から毎年、大学事務官の定員を一名ずつ附属音楽高校の専任教諭に配置転換した結果、五六には専任教諭三名となつた。五七には附属音楽高校の運営に関する「附属音楽高校運営規則」が制定され正式機関となる。

一九九五（平成七）年四月に新校舎が落成し、（一）激動の十年間

永富正之校長、梅谷進副校長の下に、上野キヤンバス時代が開始する。この年、筑波大学附属音楽校高等部音楽科主任であった海老原直秀教諭が異動して着任し、教務主任、九八年には副校長となり、四年の定員を大幅に割り、合格者が三二名となり、四十名の定員を行なう。文部省の指導により、二次募集を行い、その結果、計三六名の入学となった。この定員割れを契機として以前は年名が入学する。

一〇〇〇（平成十一）年度入試において重要な事態が発生する。すなわち、合格者が三二名となり、四十名の定員を大幅に割り、合格者が三二名となり、四十名の定員を行なう。文部省の指導により、二次募集を行い、その結果、計三六名の入学となつた。この定員割れを契機として以前は年

永富正之校長、梅谷進副校長の下に、上野キヤンバス時代が開始する。この年、筑波大学附属音楽校高等部音楽科主任であった海老原直秀教諭が異動して着任し、教務主任、九八年には副校長となり、四年の定員を大幅に割り、合格者が三二名となり、四十名の定員を行なう。文部省の指導により、二次募集を行い、その結果、計三六名の入学となつた。この定員割れを契機として以前は年

間一回であつた附属音楽高校運営委員会がほとんど毎月一回開催されるようになつた。また、入試運営委員会が入試前に必ず開催されて、定員確保の方針が確認されるようになり、以後、入試における定員割れは生じていない。こうしてむしろ、大字との連携が推進され、学校運営が円滑になつた。災い転じて福となつたのである。一九九七年四月に附属音楽高校の過去の寄付金（平成九）年に開催する会計運営受験生指導などに関する問題がマスコミでとりあげられ、附属音楽高校は鋭い社会的批判を浴びた。山本校長、海老原副校长、鈴木実務室長は以後二年間にわたり、関係者に開催する会計運営受験生指導などに関する問題につき詳細な調査活動を行い、この問題を処理した。この事件は附属音楽高校の教育と運営に苦い教訓となり、その総括と反省に立ち、健全な学校運営を目指して再出発した。〇一年二月には国立大学附属校として当然のことであるが、それまで実現していなかつた懸案の「研究紀要」第一号を発行した。〇三年十一月には組織加盟してい研究協議会の全国音楽高等学校協議会（全国大会）が本校を会場として開催された。これは十二年ぶり一度目の開催である。その際、東京地区の理事校生徒有志による同オーケストラが編成され、奏楽室で演奏が行われ、音楽高校教育の向上と協力に貢献できたことは有意義であった。〇一年六月の公開実技試験のピアノ専攻の発表は奏楽室で開催され、〇五年度にはピアノと弦楽器が奏楽室で開催される予定である。聴衆多数のため、附属音楽高校（一）ホールでは手狭であった問題がこれまで解決を見た。〇四年五月には英国青少年音楽コンサートに出演する予定である。九〇年以後行なわれなかつた校外演奏旅行はこうして一五年ぶりに復活したのである。この間、〇一年には英語専任教諭一名のうち一名の中川泰成教諭が退職した後を非常勤講師が担当し、沼田宏行教諭（ピアノ）



お茶の水時代の校舎(1980年代初め)

(一) 附属音楽高校の将来像  
平山郁太郎の下に「東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校の在り方にに関する調査検討委員会」が設置され、〇一年四月から〇三年三月の一 年間にわたる調査検討の結果が「附属音楽高等学校の在り方について」としてまとめられた。そこには太字と附属との連携として、大学の授業への附属音楽高校生の出席、内部推薦制度と飛び級制度の導入、中学生を対象としたセミナーの実施、寄宿舎の設置などが掲げられている。また、当初附属音楽中・高等学校案も検討されたが、結局台東区内において週末に中学生などを対象として音楽の基礎指導を行い、音楽の爱好者を育てて社

会貢献をする「芸大音楽専門基礎教育プロジェクト」案が作成された。地方に出張してセミナーを行い、上野キヤンバスあるいは地域においてこのよつた教育活動を行い、地方演奏旅行によって各地への文化的貢献を行うことが附属音楽高校の活動を通して保護者会は毎年、校外合宿やオーデストラの入件費などのほかに、図書室の整備や図書業務の入件費を支える等、附属音楽高校教育に関して多く貢献をされてきた。〇三年一二月にはオルガン（草刈オルガン制作）が寄贈された。〇四年に附属音楽高校は創立五〇周年を迎えて、十一月に記念定期演奏会、卒業生演奏会（室内オーケストラ）、シンポジウム、オープニングキャンパスを開催した。

が着任し、〇四年には数字担当の大澤幾子教諭が筑波大学附属高校への異動後、非常勤講師が担当し、安富洋教諭（弦）が着任して、音楽担当教諭が以前の二名から四名体制になった。また、保護者の活動を忘れてはならない。後援会の教育後援活動を通して保護者会は毎年、校外合宿やオーデストラの入件費などのほかに、図書室の整備や図書業務の入件費を支える等、附属音楽高校教育に関して多く貢献をされてきた。〇三年一二月にはオルガン（草刈オルガン制作）が寄贈された。〇四年に附属音楽高校は創立五〇周年を迎えて、十一月に記念定期演奏会、卒業生演奏会（室内オーケストラ）、シンポジウム、オープニングキャンパスを開催した。

教育と学校の存在と教育の縮小、情報叡伝にも役立つのは明確である。約半分が首都圏以外の出身者で占められ、高い家賃を要するアパート暮らしを余儀なくされ、保護者の経済的負担が強いらしく、これらは生徒が安全で健康的な環境で勉強するためには寄宿舎の設置が必要である。その実現がすぐには困難ならば、一定のアパート業者などと提携する民間提携型の方法も考える必要がある。この調査検討委員会の答申案を縦に描いた餅に終わらせず、大学全体のヴィジョンとして、ぜひ、その実現に向けて前進して欲しい。可能性に充ちた生徒たちを全人的に教育していくには専門実技、音楽科目のみならず、普通科教育、体育など総合的な視野に立ち、学校生活における生徒指導をさらに徹底していかねばなるまい。お茶の水期にそうであったように大学の併任教員の協力とともに何よりも附属音楽高校専任教員の教育への熱心な取り組みが望まれる。独立法人化後の厳しい時代に突入した今、特に、附属高校専任教員間のメンバーシップ、運営の実質的責任者である副校長の強力なリーダーシップが今までにも増して必要とされるのである。

（えびはら・なおひで／附属音楽高等学校副校長）



附属音楽高校ホール



附属音楽高校アンサンブル室

# 卒業生・在校生インタビュー

## 藤家渢子

ふじいえ・けいこ  
一九六二年京都府生まれ。  
附属音楽学校第六期生。

「尾高賞」を二度にわたり受賞するなど高い評価を得ている。  
「五〇周年記念委嘱作品」として「東へ」を作曲した。



「東へ」は、三曲からなるピアノの

ための組曲です。ツルゲーネフ、ネルヴァー、松尾芭蕉という三人の文学者の足跡を追うよう、ヨーロッパから中東、日本へと旅するこの曲の底辺には、実は「葛藤」というテーマがあります。ピアノという楽器や日本人の音楽家が持つていて「葛藤」を曲にしてみたのです。

私自身、ピアノの響きに洗礼を受けて音楽の世界に進んだのですが、作曲家の立場から、この楽器が果たしている役割に対し批判的な意識で問いかねました。音楽の現状は、ピアノという楽器を保守的に扱うあまり、豊穣な世界の一

うか。

また、自分のルーツというものをどう表現するのか、あるいはしないのか、という「葛藤」もここには込められています。日本人は外国に行つたときに、「あなたの国の音楽は?」とたずねられて、はじめて邦楽を自覚し、自國の文化を見直してみると思うのです。今、芸高にも邦楽はあります、私自身、当時は邦楽との接点の持ちようすらわかりませんで

いたのは、いろいろな楽器や作曲専攻の友達と出会えたことです。みんな自分の考えがあつて、しつかりしていることに驚きました。

初めて友達の演奏で邦楽を聴いたときには、とても感動しました。また、定期演奏会で、みんなで真剣に意見を出し合い、一つの音楽をつくりあげていったことは、かけがえのない大切な思い出となりました。

去年（二〇〇四年）の五月に、「英國青少年音楽祭」に参加させていました。地域の小学校で演奏させていたいたいワーキショップでは、子供たちがとても真剣に聴いてくれました。そして、夜の音楽祭には、家族の方々と一緒に来てくださったのです。ヨーロッパでは音楽を聴くことは特別なことではないんだ、ということが印象に残りました。

まだまだ勉強の身ですが、将来は、音楽を日常生活に溶け込んだ自然にみんなで楽しめるものにすることが、私たちの役割の一つだと思っています。

まだまだ勉強の身ですが、将来は、音楽を日常生活に溶け込んだ自然にみんなで楽しめるものにすることが、私たちの役割の一つだと思っていました。また日本人が西洋音楽を演奏するときにつきまとう「信仰」の問題というのも、頭に浮かびました。した。また日本人が西洋音楽を演奏するときにつきまとう「信仰」の問題というのも、頭に浮かびました。

「芸高五〇周年」を機会につくったこの曲は、芸高、そして芸大で学んできた私が、今日まで抱き続けてきた思いの一部でもあるのです。

## 瀧村依里

たきむら・えり  
一九八六年兵庫県生まれ。  
附属音楽高校第四期生（三年在学中）。



芸高に入学して、いちばん嬉しかったのは、いろいろな楽器や作曲専攻の友達と出会えたことです。みんな自分の考えがあつて、しつかりして

いることに驚きました。

芸高に入学して、いちばん嬉しかったのは、いろいろな楽器や作曲専攻の友達と出会えたことです。みんな自分の考えがあつて、しつかりしていることに驚きました。

初めて友達の演奏で邦楽を聴いたときには、とても感動しました。また、定期演奏会で、みんなで真剣に意見を出し合い、一つの音楽をつくりあげていったことは、かけがえのない大切

# 東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校 創立50周年記念事業

2004年11月3日（水・祝）同窓生によるソロ・室内楽コンサート

東京文化会館小ホール 開演15:00



11月5日に旧奏楽堂で行われた芸高生による邦楽演奏

## M.ラヴェル：序奏とアレグロ

シュレイファー遠藤弓子（ハープ）、藤井香織（フルート）、三界秀実（クラリネット）、野口千代光（第1ヴァイオリン）、川口静華（第2ヴァイオリン）、中島久美（ヴィオラ）、浅岡洋平（チェロ）

## F.プーランク：ホルン・トランペットとトロンボーンのためのソナタ

堂山敦史（ホルン）、杉木淳一郎（トランペット）、西岡基（トロンボーン）

## 藤家溪子：東へ（50周年記念委嘱作品）

江口玲（ピアノ）

## F.シューベルト：ピアノ五重奏曲「ます」

松原勝也（ヴァイオリン）、百武由紀（ヴィオラ）、菊地知也（チェロ）、西山真二（コントラバス）、迫昭嘉（ピアノ）

## メシアン：アーメンの幻影より

木村かおり、野平一郎（ピアノ）

11月5日（金） 芸高オープン・キャンパス

附属音楽高等学校内【芸高ホール】【203アンサンブル】にて 14:00～16:30

## 芸高生による演奏

旧東京音楽学校奏楽堂 開演17:00

筝曲「編曲 八千代獅子」／長唄「太鼓の曲」／J.M.ダマーズ：五重奏曲／平川加恵：フルート、トランペット、ピアノ及び弦楽合奏のための協奏曲風組曲

## シンポジウム「芸高の50年を振り返り 21世紀を展望する」

旧東京音楽学校奏楽堂 開会18:30

加納民夫（司会・コーディネーター）、金山茂人、外山浩爾、神野峯一（以上、パネリスト）

11月6日（土） 50周年記念式典

東京芸術大学奏楽堂 開会14:00

## 第16回芸高定期演奏会

東京芸術大学奏楽堂 開演15:00

### ●第1部 邦楽合奏

宮城道雄 作曲：筝曲「遠砧」

邦楽科生徒（筝、三絃、尺八）

九世 杣屋六左衛門 作曲：長唄「越後獅子」

邦楽科生徒・芸大学部生（長唄、三味線、邦楽囃子）

### ●第2部 オーケストラと合唱

ベートーヴェン：交響曲第5番「運命」／短調 Op.67

佐藤功太郎（指揮）、東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校生徒

ヘンデル：オラトリオ「メサイア」より

佐藤功太郎（指揮）、木部敏司（合唱指導）、東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校生徒

11月7日（日） 同窓生オーケストラコンサート

東京芸術大学奏楽堂 開演15:00

J.S.バッハ：ブランデンブルグ協奏曲 第5番 二短調 BWV.1150

野原みどり（ピアノ）、小林美恵（ヴァイオリン）、佐久間由美子（フルート）

高橋裕：2群の筝と弦楽合奏のための“天籟”（50周年記念委嘱作品）

佐野美和、守時昌美、大西愛子、前川智世（筝）

佐藤眞：ピアノ協奏曲

永野英樹（ピアノ）

I.ストラヴィンスキー：火の鳥

# 芸大の歩き方

## —上野の杜のキャンパスガイド—

### 第2回★彫刻

歴史ゆかしい「上野」という場所に校地を構え、明治以来の伝統を誇る芸大の隠れた「名所」を毎回テーマを変えて紹介する。



彫刻を探せ！

布施英利

上野の杜は、彫刻の森でもある。  
芸大のキャンパスには、たくさんの  
彫刻がある。木漏れ日を浴びながら、  
彫刻を鑑賞して歩くのも楽しい。

お勧めのコースは、まず美術学部の  
森である。キャンパスの中央あたりに、  
小さな森がある。クスの巨木や、シイ、  
トチなどが混然と茂っている。散策路  
もある。そのなかに建っているのが六  
角堂だ。秋には、周囲のモミジやハゼ  
が赤く染まる。夕方になると堂内はラ  
イトアップされる。

六角堂にあるのは、平櫛田中が作つ  
た「岡倉天心像」（一九三一年）だ。  
彫刻家・田中には釣人姿の天心像がい  
くつかあるが、こちらの天心は正装し  
ている。さすが東京美術学校校長とい  
う風格がある。堂の背面板には「Asia  
is One」と刻まれている。「東洋の理  
想」の冒頭の言葉だ。

「ここには日本、東洋の歴史がある」  
などと感慨を抱いて眺めていると、そ  
の背後に何かの視線を感じる。誰かが、  
「ちょっと待ったあ！」と言っている  
ようだ。ロダン作の「バルザック像」  
(一九八七年)だ。

バルザックは、天心を睨みつけてい  
る。「アジアが一つ？」とヨーロッパ  
の文豪は挑戦的である。この天心像と  
バルザックの位置関係、それにしても  
絶妙だ。意図して配したのか、偶然な  
のかはわからない。しかしこの距離感、  
緊張感。芸大の森の彫刻鑑賞の、ひと  
つのクライマックスである。



H 川端玉章  
1842～1913年 四条派の画家  
[武石弘三郎作]



I 寺崎広業  
1866～1919年 日本画家  
[内藤伸作]



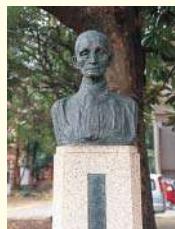
J 安井曾太郎  
1888～1955年 洋画家  
[石井鶴三作]



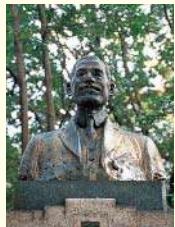
K 藤島武二  
1867～1943年 洋画家  
[本郷新作]



Q 海野勝限  
1844～1915年 銀金家  
[海野美盛作]



R 香取秀真  
1874～1954年 銄金家  
[平松田中／菅原安男作]



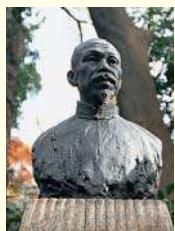
D 久米桂一郎  
1866～1934年 洋画家  
[北村西望作]



C アーネスト・フェノロサ  
1853～1908年 美術史家  
[長原孝太郎原画]



B 岡田三郎助  
1869～1939年 洋画家  
[田辺至作]



G 大村西崖  
1868～1927年 彫刻家・美術史家  
[朝倉文夫作]



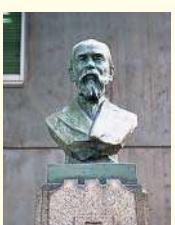
F 白井雨山  
1864～1928年 彫刻家  
[建島大夢作]



E 橋本雅邦  
1835～1908年 狩野派の画家  
[白井雨山作]



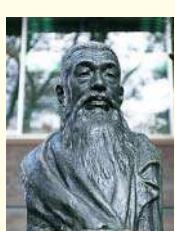
N 高村光雲  
1852～1934年 彫刻家  
[高村光太郎作]



M 石川光明  
1852～1913年 彫刻家  
[朝倉文夫作]



L 加納夏雄  
1833～1898年 彫刻家  
[米原雲海作]



O 竹内久一  
1857～1916年 彫刻家  
[沼田一雅作]



1 オーギュスト・ロダン  
作「バルザック像」



2 オーギュスト・ロダン  
作「青銅時代」



3 保田龍門作  
「ベートーベン像」



P 正木直彦  
1862～1940年 美術行政  
[沼田一雅作]

なおロダンの彫刻は、ほかにも図書館裏に「青銅時代」がある。また芸術の巨匠の像といえば、音楽学部にはベートーベン像もある。楽聖は奏楽堂を正面からみている。  
森と彫刻と偉人たち。芸大の庭には、美と自然がきらめいている。  
(ふせ・ひでと／美術学部助教授美術解剖学研究室)

# た芸大

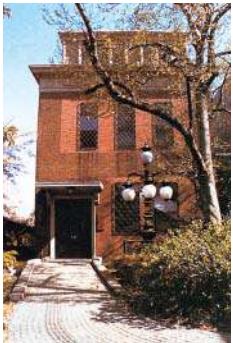
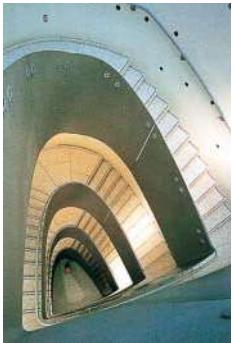
第10回

## 1991～2000年

最終回



大学美術館全景



上右：食堂テラスを見下ろす  
上左：大学美術館（上野）の  
螺旋階段  
左：陳列館  
(写真は4点とも『東京芸術大学美術館』より)

# 1990

一九九一（平成十一）年十月四日、上野校地に大学美術館が盛大に開館した。この日は開校記念日。一八八七年（明治二十）年に東京美術学校が設置された日から、百二十年め。この間に蓄積されたコレクションは、二万七千件にのぼる。近現代の日本美術コレクションとしては、質・量ともにまちがいなく最大級だ。なにより、制作の現場で収集・蓄積されてきた点に、特色がある。まさにそれは、多くの人々がここに生きてきた証だ。そのコレクションの中から、えりすぐられた作品一五七件による「開館記念・東京芸術大学美術館所蔵名品展」には、一ヶ月余りの会期中に、じつに三十四万人の人々が訪れた。それまで校内に一般の人はありませんなかつたから、その新鮮さもあったのだろう。かつて若き日の巨匠たちが踏みしめた地を、確かめるように逍遙し、未来のアーティストたちと同じ食堂で食事を楽しむ人々の表情は、とても印象的だった。そうです、彼らがこれからを担っていくんです、応援してあげてくださいといいた

### 東京芸術大学美術学部1999年 大学美術館開館

#### 佐藤道信

日本近代美術史、主要著書に『〈日本美術〉誕生—近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術—美の政治学』がある。

くなる温かな空気気が、そこにあった。

大学美術館は、大浦食堂のあった場所に建てられた。

戦前から貧しい学生たちを支え、美校名物の一つだった大浦食堂は、いまも美術館の一角で家庭の味を提供してくれている。ほかにも生協や画翠、ホテルオークラのフェテリア、ミュージアムショップなども入っており、学校生活を支える場にもなっている。

美術館がここにできたことで、上野校地の美術学部は、敷地の中央に縁を残し、周囲をぐるりと建物がとりかかる形になった。美術館では、特別展のほか、各科主催の企画展や、修了制作展なども行われ、教育研究の現場と社会を結ぶ場になっている。展示施設としては、旧芸術資料館の陳列館も、小企画の展示に使われている。昭和初期のレトロな外観だが、内部は現代美術にもピッタリの使い勝手のいい空間だ。拠点となるこうした場だけではなく、校内のあちこちにも作品を展示し、現場と展示を一体化させたうどつかという「ブーケトリー・ミュージアム」の構想もあった。

一方、この一九九〇年代には、取手校地の開校（一九年）という大きな動きがあった。いまここには、美術学部の一年生と、先端芸術表現科、一部の大学院、音楽学部の音楽環境創造科が展開している。ここにも美術館がある（九四年開館）、設計は、上野・取手の両館とともに、本学建築科の六角鬼丈。取手館には、各科教員約三十名による遊び心満載の装飾も仕込まれている。また上野館のロゴマークは、デザイン科の蓮貝智幸。まさに美術の現場の強みが、最大限に發揮されている。

芸術とかアートとかいうと、高尚、カッコイイ、でもこむずかしいというイメージも強い。アーティストは作品という自己実現の手段があるからか、パワフルだが素朴で優しい人が多い。この大学、なんかみんな表情が明るいね、と言った人がいた。作品だけでなく、アーティストという人にも触れる機会があつたら、きっとみんなハマるだろう。そんな魅力がある。「創る」ことの原点も、そして可能性も、同じのかもしない。

（さとう・どうしん／美術学部藝術学科助教授）

# タイムカプセルに乗つ

## 東京芸術大学音楽学部1998年 新しい奏楽堂の完成

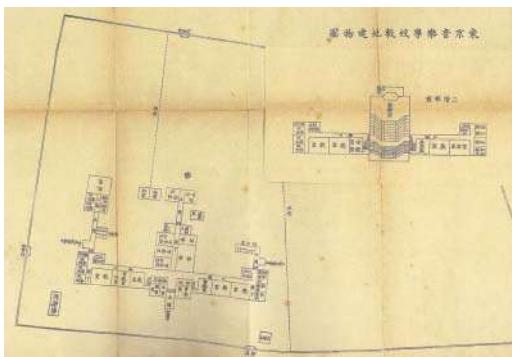
瀧井敬子

音楽学（ドイツロマン派、および日本洋楽草創期の研究）。著書に『漱石が聴いたベートーヴェン—音楽に魅せられた文豪たち』、『森山外記オペラ「オルフェウス』（解説・校訂）がある。

一九九八（平成十）年四月二十三日、「奏楽堂竣工記念式典」が行われた。これは一代目の奏楽堂である。

一八九〇（明治二十三）年、東京音楽学校の新校舎に講堂として付設されたのが、初代の奏楽堂であった。校食全体を、ふたつの翼を以て一杯に広げた鳥にたとえるならば、初代奏楽堂はその頭部と胸のあたりに相当しようが、当時、ここは日本で唯一のコンサートホールとして、わが国の洋楽草創期の華麗な中心的舞台となつた。寺田寅彦に誘われてここにしばしば足を運んだ夏目漱石も、その感想を小説『野分』の作中人物の一人に、「樂堂の入口を這入ると、霞に酔ふた人の様にぼうとした。空を隱す茂みのなか通り抜けて頂に攀じ登った時、思ひも寄らぬ、眼の下に百里の眺めが展開する時の感じは是である」と、いささか諧張気味に語りつけている。

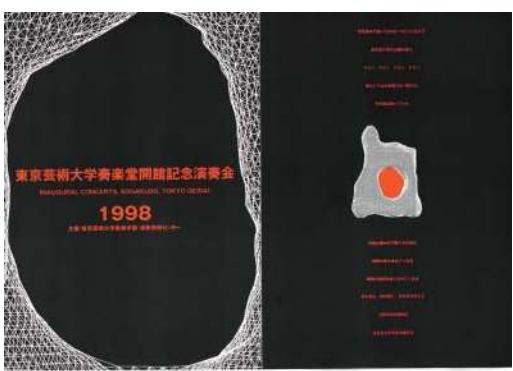
一八九九年に作成された「東京音楽学校敷地建物図」



『東京音楽学校一覧 明治32年至明治33年』に掲載された「敷地建物図」



二代目奏楽堂の竣工記念式典におけるテープカットのシーン（三笠宮殿下、妃殿下をお迎えして）



開館記念演奏会のプログラム。表紙デザイン&キャッチコピー：日比野克彦

を見ると、二階建ての両翼に教室、練習室が櫛並んでおり、一階に「男教員和室」、二階に「女教員室」とそれぞれ分かれてい、その頃のモラルの反映として興味深い。東京音楽学校は当時日本で唯一の男女共学の学校であったが、男子学生と女子学生がみだりに話をすることは禁じられていた。そつした倫理観が教員室を別々にすることにも表れていたのである。奏楽堂は二階部分にあつて、その奏楽堂を挟んで校長室と「女教員室」があつた。

一九七一（昭和四十七）年になると、老朽化が激しくなった奏楽堂を巡って、これを明治村へ移築して、新しい奏楽堂を建てる計画が具体化した。ところが、明治村への移築が決定して、実際に作業に入ろうとしていた矢先の一九七九（昭和五十四）年十月、日本建築学会と音楽家のグループがその移築案に猛烈な勢いで反対した。彼らは奏楽堂の現地保存の要望書を文部省と東京芸術大学長に提出したのである。こうして新奏楽堂の建設計画はストップせざるを得なくなり、初代の奏楽堂をどこに移築するかという問題で、その後幾年もの間、激しい

議論が交わされることになった。結局、台東区に移管され、上野公園内で一九八七年三月、初代奏楽堂は修復と移築を完了。こうして新しい命を得たのは大いに慶賀すべきことであった。  
とはいって、一度頓挫した新しい奏楽堂の建築計画はその後「十年近くも中断され、夢は夢で終わるかに見えた。ところが二十一世紀を目前にした一九九八年、大学の悲願は実った。一代目の奏楽堂が初代のあった場所に落成したのである。「奏楽堂竣工記念式典」に続いて、四月二十八日から六月六日まで全十一回にわたって、開館を祝う特別コンサートが盛大に行われた。当時の文部大臣の町村信孝はプログラム寄せた祝辞のなかで、「日本における西洋音楽の歴史は東京音楽学校の奏楽堂から始まった」と言えるが、「新しい奏楽堂は二十一世紀に向けて新たな芸術文化の創造と発信拠点」となるだろう、と述べている。  
大学の積年の夢が叶って、一代目の奏楽堂が誕生してから今年で、はや七年になる。

（たきい・けいじ／演奏藝術センター助手）



# サンバ・パーティ

## 訪問 サークル

第1回

芸大生たちは、創作・演奏に研鑽を積む一方で  
さまざまなクラブ・サークルに属している。  
「明るく」「楽しく」「美しく」活動する  
東京芸大の“部活”を紹介する。

## お祭り好きの 打楽器アンサンブル

野村 真理

音楽学部の片隅にある部室で活動し始めてはや四半世紀。今や芸祭をはじめ、お祭り騒ぎの大好きな芸大生にとって、なくてはならない存在となつたサンバ・パーティは、周囲からうるさいと文句を言われようと、今日もめげずに活動している。

さて、サンバというと、キラキラの派手なビキニのお姉さんが華やかに踊る姿を想像する人が多いと思うが、サン



サンバ・パーティーの晴れ舞台、秋の「芸祭」

狭い部室での、熱の  
こもった練習風景

バにもわもわもな形態があり、私たちサンバ部ではバツカータ (Batucaata) と呼ばれる、旋律や歌唱のない純粋な打楽器アンサンブルを活動の中心にしている。芸大の入学式や卒業式、芸祭などで聞かれる騒々しい音といえば心当たりのある人も多いだろうが、それが私たちのサンバである。

現在、部員は約三〇名。打楽器アンサンブルというと、部員は音楽学部生ばかりだと思われるがちだが、部員の半数は美術学部生である。残りの音楽学部生も、打楽器未経験の薬理科の学生がほとんどで、打楽器専攻の学生など一人もない。そんな頼りない部員構成だが、皆樂しいことや目立つことが大好きで、持ち前の美的感覚と根性を生かしながら(?)、練習を重ねている。練習といつても楽譜などは存在しないので、もっぱら先輩から後輩への口頭伝承が中心である。そのため皆仲がよく、上下の結びつきも強い。

芸祭の時期となると、毎年OBやOGがたくさん集まり、練習に参加して教えてくれたり、模擬店の出店準備を手伝ってくれたりする。また、現在はそれぞれ独立して活動しているが、もともと芸大サンバ・パーティーが母体となつて結成され、毎年浅草サンバ・カーニバルを賑わしている学生サンバ連合のユニアン・ドス・アマドーリス (União dos amadores) のメンバーたちもかけつけてくる。そのなかには、文字通り一肌脱いで、例のキラキラのビキニで踊ってくれる人もいて、芸祭を盛りあげるのに一役買つてくれている。このように多くの先輩や仲間たちに支えられて、サンバ・パーティーの今日がある。私たちも、新たな歴史の一ページを築けるよう積極的に活動していきたいたい。

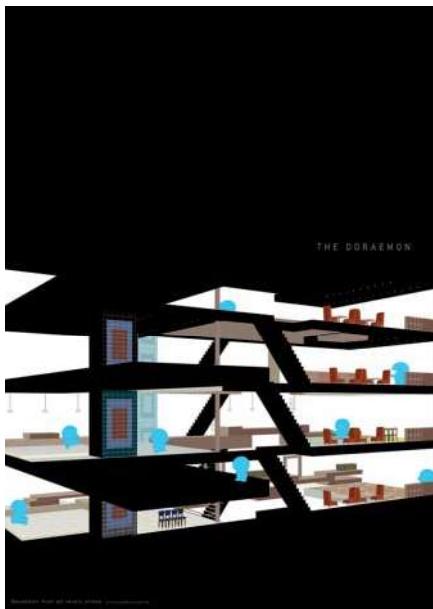
三月——そろそろまたサンバが聞こえる季節ですね。

(のむら・まり／音楽学部薬理科二年)

# 教員は語る

—芸大への期待・抱負・提言—

第二回



「ドラえもん展」／2002年／CL THE ドラえもん展製作委員会／AD松下計／D松下計／I松下計／Fujiko-pro & Matsushiko Kei  
2002

# 松下 藤本 隆文

助教授—器楽科（打楽器）

助教授—デザイン科（観覚・伝達）



## デザイン、打楽器と芸大の立ち位置

松下 藤本 隆文  
デザインという領域は、長く数えると二千

年という考え方もあるのですが、短くとらえるとまだ二百年くらいの歴史しかないのです。ですから解説が今も進んでいるのでどんどん専門細分化されているというところでしようか。

デザインの解釈が常に更新されていて、だんだん本質化に向かうほうには行っています。ただ、地球全体で見たデザインシーンのなかの日本の立ち位置と、日本における芸大の立ち位置というの

は非常に相似形をしている。それはどうということなかというと、造形性を重んじていくということなんです。われわれの業界では必ずしも絵画を見るような視線や、彫刻を見るような視線だけでデザインをはかるわけではない。デザインというの

は計画そのもの、提案そのものですので、造形性を重んじてデザインというものを語る日本独自のコアで、いちばん強いところなんです。これはわれわれの重要な武器なのでこの足場を崩さない、ということが必要かもしれません。もちろん「造型性」という言葉の意味も広がっていることを理解したうえでですが。





「Design News 261号 リニューアルExhibition」／2003年／CL 日本産業デザイン振興会／AD松下計／D田辺智子／P松本理加／CD山田裕一

**藤本** 松下さんが今おっしゃっていたことと実によく似ていて、打楽器が独自に何か動き出した歴史というのは、百年にも満たないのです。打楽器が独立して主張し出したのは、二十世紀に入つてからなんですね。それまでは、オーケストラの脇役だったわけで、歴史が始まつたばかりの、今まさに混沌とした状態なんです。だから、変化し続けている真っ最中というところですね。

それと同時に、やっぱり細分化の空気というのは、音楽の世界でもあります。そうすると、もう専門的にどんどん狭いところを専門とする人が、やっぱり多くなってきていて、少し離れた位置から、感じたり聞いたりする姿勢というのがだんだん少なくなっています。

そんななかで、芸大は、やはり突出しているとともに少し特殊な場所だと思うんです。都内にあるほかの音楽学校を見ても、専門学校的というのか、細分化を歓迎する傾向があります。例えば、オーケストラプレーヤーを養成するコースがあつたり、打楽器科でもいくつかに分けて、その道のエキスパートを育てて即戦力をつくるうとしていたり。私学ですから、実績が出せる方向に行くのは当然のことです。芸大にそれがないかといえば、そういうわけではないのですけれども、打楽器の

特殊性かもしれないのですが、打楽器の窓から外を見るというスタンスを持つる唯一の学校だと僕は思うんです。

打楽器という楽器は、あまりにも漠然としたジャンルなんですね。もともと西洋音楽のなかの打楽器というのは、民族音楽の味つけとか香りづけみたいな役割だったのです。だから、楽器の性質上、結局自分のいるところで何かするというよりも、自分の外で何が行われているか、というのを知る姿勢がないとやつていけない。それがほかの楽器との圧倒的な違いなんです。そういう視点を持つて日本では唯一の学校ではないかと、僕は思っています。

## 交流への意欲

**松下** 美術学部のなかで、建築科とデザイン科だけが、制作したものがシミュレーションなんです。日本画、彫刻科や工芸科の学生は、どんな作品であつても本物ですが、デザイン科のつくる作品というのは、例えば電話のデザインをしたとしても、それはかけられる電話ではないんですね。ポスターをつくつても、それを刷つて町に貼るわけじゃない。だから、作品を同じ土俵へ持つてき

松下計（まつした・けい）  
一九六一年神奈川県生まれ。

一九八五年東京芸術大学美術学部デザイン科卒業。  
一九八七年東京芸術大学太学院美術研究科ビジュアルデザイン専攻修了。  
一九九〇年松下計デザイン室設立。  
東京芸術大学美術学部非常勤講師を経て、二〇〇四年より助教授。

て相撲をとらせると、それは負けるに決まっているのです。われわれの本質は、提案なんですよね。

電話やポスターが製品ではなくて、情報そのものが作品なわけです。その意味では先端芸術表現科と共有している部分がある。自分たちの立ち位置を社会に配置することが仕事の一部なのです。

**藤本** 芸大のなかで、ほかの先生方との共同作業というと、今のところあまりないですね。打楽器の場合、弦楽器の先生方とか管楽器の先生方と、同じオーケストラで一緒に演奏するとか、あるいは何かアンサンブルで一緒になつたりすることは楽器の性質上あるのですが、でもそのくらいです。それでも、洋楽同士はかなりつながりがあると思うのですが、この学校は邦楽科があるでしょう。邦楽と洋楽の接点というのはあまりないですもんね。

僕はこの学校にお世話になることになつて、いちばん楽しみだつたのは、邦楽科の先生と何か接触がとれるんではないかということだつたのです。全く未知の世界だから。邦楽離子という、いわゆる邦楽の打楽器のセクションがあります。でも全く交流がないのです。コンテンポラリーをやる人間にとつては邦楽器、邦楽のハードでもソフトでもすごく興味のあるところのはずなのに、全然お互いにやりとりがなかつたらしいというのもつたいないなと思って。お互いにすごく刺激になることが山ほどあるはずだと思います。僕は今からなるだけ邦楽科の先生のところに遊びに行きたいと思つて楽しみにしています。

## 共同作業の可能性

**藤本** 打楽器のコンテンポラリーな、いわゆる現代音楽と呼ばれるジャンルの曲には、聴覚だけで

はなくて視覚的な要素も非常に大きいんです。ほ

かの楽器に比べて運動性があるのと、楽器そのものの見た目に特徴があって、同じ曲なのに、人に

よつて組み合わせ方とか楽器の色であるとかが全部違う。そういうところに個性が出てきたりする

わけですが、ほかの楽器よりも打楽器のほうが、道路の向こう側（美術学部）に近いような気がします。何か共同作業ができるとしたら、いちばん可能性が高い楽器は、実は打楽器ではないかと思



藤本隆文の演奏風景。1999年カザルスホールにて

うんです。

**松下** そういうことができるといいですね。デザインにはいろいろなものをつないでいく仕事があるので、本当はわれわれが音頭をとつてもいいことなんでしょうね。

**藤本** 昔、チエンバロ奏者で、リサイタルのときチエンバロの胴体に、いろいろな画家の人何か描いてもらうという人がいました。演奏する作品を、事前に聴いてもらつて、イメージをつくつて

もらう。会場全体を、音と視覚の共同でつくつていくというコンサートをなさっている方もいました。音だけじゃなくて、視覚的要素が入ることで全く聴こえ方が変わってくるから、絶対おもしろいと思います。

松下 そうですね。やっぱりわれわれ「がやつている仕事」というのは、基本的には全体価値だと思いますので、スポット的に見るということではなっています。芸大という場所はやっぱり総合的につきの環境かもしれませんね。

## 感動の差異を埋める

松下 デザインの世界では、細分化が進んでいる一方で、深化もしているということも事実なのです。まず、そういうものを大きく捉えて、本質といふのは簡単につかめるものではないのですけれども、そういうみなぎりを持つということを、僕は多くの人と共有したいと思っています。

デザインの本質は文化と言つてもいいのですが、オペラを観たり、額縁に入つた絵を鑑賞することも文化だけでも、生活そのものが文化なんですね。要するに、カルチャーというのは耕すという意味ですから、生きていく営みそのものが文化

なのです。だから、われわれはそこにも目を向けていかなくてはいけないので、周りを完全に静寂に押さえつけて、有利な立ち位置からデザインを語らないようにしないといけない。もっと広くデザイントしていくべきだと考えたいのです。

藤本 実技系の科の学生は、ともすると演奏だけになってしまいます。特に打楽器は、民族音楽をはじめとして、ほかの専門教養を疎かにして、実技だけやっていればいいという時代ではないと思う。とくに芸大はそういう学校じゃないと思います。だから、僕は学生には、おもしろそうな授業があれば受けに行きなさいといおうと思つています。そういう姿勢を学生に持つてほしいし、そういう雰囲気にしてほしいのです。教養科目で身についた知識や刺激も必要ですし、例えば小泉又夫先生の資料室にある楽器の半分は打楽器ですから。そういう流れを知ると知らないでは演奏が絶対変わると思うんです。自分の楽器の外に出て、いちばん食指の伸びそうな邦楽もやるというふうになつてもらいたいですね。それを学生にどんどん促していきたい。

松下 ちょっと状況が似ていますね。

藤本 さつきからお話を伺つていると、そうなんですよ。結局、演奏に戻つても、狭いものになつてしまふので、そういう環境づくりを少しづつでいいから進めたいなと思います。それには、まず何より教員自らが乗り込んでいつて、恥をかいて帰つてこようと思つていいわけですね。

松下 言われてみれば、どうして音楽学部と交流がないのだろうと思いますね。

ただ僕らは、提案や計画をやるもので、体を使って表現する人たちに対し、やっぱりある種のジェラシーがあるんですよ。例えば、僕が若いころはカメラマンなんか、シャッターを押すだけでもお金になるいい仕事だなと思っていましたけれども、でも一瞬を捉えないといけないし、撮れなかつたではすまされない世界ですよね。同じように、

音楽をなさっている方が、その瞬間に表現し披露するというのには、ちょっとかなわないなという感じがありました。

ですから、われわれがつくるうとしている感動と、音楽をやられている方たちの感動の差異みたいたところをうまく埋め合わせていかないと、そこで直ちに共有できるというほど簡単じゃないわけですね。自分のやっていることに対する近視眼的に向き合つますが、価値は全体としてあらわすんだということを、まず共有するということが大事なんじやないでしょうか。



藤本 隆文（ふじもと・たかふみ）

一九六五年東京都生まれ。

一九八七年東京音楽大学音楽学部器楽科卒業。

一九九三年神奈川フィルハーモニー管弦楽団デインパニー奏者。

二〇〇三年同管弦楽団首席デインパニー奏者。

東京芸術大学音楽学部非常勤講師を経て、二〇〇四年より助教授。

# NEWS

2004.9~2005.2

## 東京藝術大学大学院 映像研究科 平成十七年四月開設



平成十六年十二月二日、本学では、平成十七年度から新しい大学院映像研究科（修士課程）を開設することを記者発表した。

設置予定地は、横浜市みなとみらい21地区等。専攻分野は、映画専攻、アニメーション専攻及びメディア映像専攻の三分野を計画しているが、平成十七年四月に開設させるのは映画専攻のみ。

（記者発表用資料からの抜粋）  
**映像研究科の設置経緯**

明治二十年十月に設立された東京美術学校及び東京音楽学校を母体とする本学は、これまで美術と音楽に関する芸術分野の人材育成に、大きな役割を果たしてきたものと自負しています。主だった海外の先進国は、早くから映画演劇領域をカバーする国立の教育環境を整備してきましたが、我が国では昭和二十四年に本学が文部省に設置申請し、将来計画に掲げていたにも

的に流通しうる物語を基礎とした映像作品を創造するクリエーター、および高度な専門知識と芸術性を併せもつ映画制作技術者を育成することを目的としています。

カリキュラムは大別すると、自主的な創作活動と映画芸術研究の二つから構成され、それらが同時並行的に行われます。特に前者では、個人およびチーム活動により、DV、ハイビジョン、一六ミリフィルム、三五ミリフィルム

と様々なメディアでの映画作品が間断なく制作されます。後者では、記録映画を含む映画映像表現、物語分析・理論、映画制作各領域の表現技術、他の芸術領域との比較などの研究を行います。

○学生入学者定員 三十二名（監督・脚本・製作領域十六名、映画制作技術領域十六名）

○兼任教員数 八名（教授四名、助教授四名）

○キャンパス 横浜市中区本町四一四四

（旧富士銀行建物）を中心とした場所において、横浜市との連携協力のもとに展開する。

映画専攻専任教員の氏名及び担当領域  
北野武教授（監督領域・映画専攻長）  
黒沢清教授（監督領域）  
田中陽造助教授（脚本領域）  
堀越謙三教授（製作領域・教育主任）  
栗田豊通教授（撮影照明領域）  
磯見俊裕助教授（美術領域）  
堀内健治助教授（録音領域）  
筒井武助教授（編集領域）

○学生入学者定員 三十二名（監督・脚本・製作領域十六名、映画制作技術領域十六名）

○兼任教員数 八名（教授四名、助教授四名）

○キャンパス 横浜市中区本町四一四四

## 交 流

### ◆ 大学間国際交流協定締結

九月十七日、シカゴ美術館附属美術大学（アメリカ合衆国）と本学が芸術国際交流協定を締結した。調印式には、シカゴ美術大学からアンニー・ジョーンズ学長ほか一名、本学から平山学長、野田理事、太田和理事、井村美術学部副学部長、保科美術学部助教授が出席した。

また、十一月十六日には上海音楽学院（中国）と締結した。本学が締結した国際交流協定は十一万円（一千一大学等）。

### ◆ 国際交流展（シカゴ）を開催

九月一十四日から十月十七日まで、「Voice of Site "Tokyo—Chicago—New York"」展と題してシカゴ・ハーバードの美術館との国際交流展を開催した。大

学美術館陳列館及び台東区旧坂本ターレーションによる現代美術展で、シカゴ美術館附属美術大学、スクール・オブ・ビジュアル・アーツ（ニューヨーク）より教員三名と学生八名を招聘し、本学からは学生、卒業生、教員が参加して行われた。



旭日章光賞を授与された。

### ◆ 澤和樹助教授 英國北王立音楽院から Fellowship の称号

十一月二十日、音楽学部澤和樹助教授が、本学と提携校である英國、マン彻スターの北王立音楽院（Royal Northern College of Music）からFellowshipを授与された。同音楽院では、一九七四年以来、著名な指揮者や作曲家に対するFellow（學術特別会員）の称号を授与しているが、本学では初めて。東京芸大シンフォニア英國初公演、共高生室内樂グループの訪問など、同音楽院との提携に尽力したことが認められた。

## 受章・受賞

### ◆ 修交勲章 興仁章を 平山郁夫学長が受章

十一月二十一日、韓国政府から

### ◆ 秋の叙勲、福原義春理事 が受章

平成十六年秋の叙勲において、

福原義春理事（学長特命担当）が、平山郁夫学長に対し、大韓民国に功勞が明確な者で外国人に対する叙勳である修交勲章 興仁章が授与された。

平成十四年十月からは、「映像・舞台芸術に関する授業科目の開発研究プロジェクト」として、映像・舞台芸術に関する実験授業を開講し、新学部等の構想を推進することも、ヨーロッパ、アメリカ、アジア地域の映画学科等を有する大学研究機関の実情調査を行い、本学の取り組むべき組織とカリキュラムについて比較検討を重ねてきました。

第10号刊行にあたって

本学の音楽学部に附属高校が創設されたのは、1954年（昭和29）の4月であり、日本の音楽の早期教育の拠点の役割をはたしてきた。しかしこの附属高校の前身として、1933年（昭和8）に、本学のキャンパス内に上野児童音楽学園という施設が設置されて、本学で児童の音楽教育に取り組みはじめていたことはあまり知られていないだろう。1936年（昭和11）には上野児童学園新たに高等科も新設されている。アカデミズムの伝統は一日ではできあがらないのは当然であろう。

一方ニュース欄に記されているように、大学大学院に、まったく新しい映像研究科が4月に新設されることになった。本学の芸術の教育と研究は、長い歴史を踏まえつつ、新しい映像という領域にも一步を踏み出したわけである。この「藝大通信」の次号では、映像研究についての特集を組む予定で検討中です。どうぞご期待ください。

藝大通信編集長  
船山 隆

展覧会・演奏会の最新情報は、東京芸術大学公式ホームページ (<http://www.geidai.ac.jp>) をご覧下さい。

展覧会についてのお問い合わせ  
東京芸術大学大学美術館 Tel 03-5685-7755  
NTTハローダイヤル Tel 03-5777-8600

演奏会についてのお問い合わせ  
東京芸術大学大学音楽学部演奏企画室 Tel 03-5685-7700

演奏会チケットの取り扱い  
チケット販売 Tel 0570-02-0990  
東京文化会館チケットサービス Tel 03-5815-5452  
東京芸術大学美術館ミュージアムショップ Tel 03-5685-1176

その結果、映画や映像については、ある程度以上の人生経験を持つた学生を対象とする方が高い教育効果を期待でき、より優れた映画作品を制作することができます。そのため、本学での教育組織は大学院が適切であるとの結論に達しました。

このたび設置する本研究科は、二十

世紀に入つて設置されることのメリットを最大限に生かし、映画、アニメーション、デジタル・メディアなどの比較的新しい分野領域を教育研究の中核に据えた教育組織を構想しております。

台芸術に関する授業科目の開発研究プロジェクトとして、映像・舞台芸術に関する実験授業を開講し、新学部等の構想を推進することも、ヨーロッパ、アメリカ、アジア地域の映画学科等を有する大学研究機関の実情調査を行い、本学の取り組むべき組織とカリキュラムについて比較検討を重ねてきました。

その結果、映画や映像については、ある程度以上の人生経験を持つた学生を対象とする方が高い教育効果を期待でき、より優れた映画作品を制作することができます。そのため、本学での教育組織は大学院が適切であるとの結論に達しました。

一方ニュース欄に記されているように、大学大学院に、まったく新しい映像研究科が4月に新設されることになった。本学の芸術の教育と研究は、長い歴史を踏まえつつ、新しい映像という領域にも一步を踏み出したわけである。この「藝大通信」の次号では、映像研究についての特集を組む予定で検討中です。どうぞご期待ください。

## 運営

### ◆ 「興福寺国宝展」開催

九月十八日から十一月三日まで「興福寺国宝展 鎌倉復興期のみほとけ」を東京藝術大学、法相宗大本山興福寺、朝日新聞社主催により本学大学美術館において開催した。

平安末期の戦禍により灰燼に帰した奈良・興福寺。その復興の成果をゆかりの宝物で検証した展覧会で、無著・世親両菩薩立像（慶一門・国宝）などの彫像と、絵画、書跡、考古資料など、興福寺に伝わる宝物を中心に、各地の寺社や博物館などが所蔵する関連の宝物を加えた六十余件が展示されたもの。期間中の入場者数は約十万人。

### 映画専攻の概要

映画は、二十一世紀の基幹産業と期待されるコンテンツの中でも、中核的位置を占めるものです。平成十七年四月にスタートする映画専攻は、国際

◆ 平成十六年度芸術祭  
「祭に非ず」を実施  
平成十六年度芸術祭が、九月十日から十一月三日間、上野校地

◆ 学生主体の運営  
取手校地アート・バス'04  
アート・バス'04「飛べ、井の中の蛙ー学生「五〇匹」による作品発表ー」が十一月十日から十一月十二日まで、本学取手校地において開催された。オープンキャンパス的意味合いをもった、学生を中心とした展覧会で、今年は十三回目。当初から学生が主体となって運営している。油画、デザイン科、先端芸術表現科、音楽環境創造科は、



